

体育学部に移管された天理スポーツ・オリンピック研究室の再出発①

近藤雄二・田里千代（天理大学体育学部）

おやさと研究所「天理スポーツ・オリンピック研究室」は、この4月体育学部に移管され、6号棟4階に「天理スポーツ・オリンピック共同研究室」を構えました。

体育学部では、今後2年間で研究所時代の研究室が蓄積した資料とその活動成果をまとめ、天理で行われてきたスポーツが「天理スポーツ」と呼ばれるようになった背景を、生みの親でもある創設者、中山正善氏（1905～1967年）の想いと活動から読み解いていきます。その先には、天理スピリットの抽出と同時に、今後の天理スポーツの継承・普及を目指す研究拠点のあり方を含め検討を見据えています。

本研究室を立ち上げた井上昭夫おやさと研究所・前所長は、創設者の生涯とスポーツを考える上で次の7つの課題をあげています。

- ・ 創設者のスポーツとの関わりを幼少時代から自叙伝的に習知すること。
- ・ 創設者のスポーツ運動とその国際的、社会的、教育的貢献度を紹介すること。
- ・ 創設者のスポーツ伝道に示された信仰的・宗教的意味世界を読み取ること。
- ・ 創設者のスポーツ関係者とのさまざまな人間的エピソードを物語ること。
- ・ 創設者のスポーツ運動の独自性を日本体育・スポーツ史の中に位置づけること。
- ・ 創設者のスポーツ促進運動の中に示唆されている普遍的思想を探求すること。
- ・ 創設者のスポーツ精神を継承するために、具体的な実践目標を立ち上げること。

上記の課題を据えながら、体育学部では研究所時代の活動成果を振り返りつつ、今後につなげる研究のために「天理スポーツの継承と発展」をテーマとした研究会を始動させました。同時に今年は、五輪の年です。天理スポーツ・オリンピック共同研究室につづく階段踊場を「Exhibition Tenri」(ET)と名づけた天理スポーツの常設展示スペースにしました。(近藤雄二)

Exhibition Tenri

今回の展示は、「活用」という目的を念頭に置いて実施してきました。一つは、既述のように本年度から体育学部に移管された研究室の貴重な資料の活用です。これまでの天理スポーツギャラリー展のために作成された多くの写真パネルを単に保管しておくのではなく、なるべく多くの方々目に触れるように活用することでした。二つ目には、人材の活用です。今回の展示は企画からオープンキャンパスでの案内に至るまで、本学部の体育学演習を履修する3年生10名のゼミ生を中心におこなってきました。この学年から新しく設けられた「創造コース」に所属している学生が多いことから、スポーツを「見て学ぶ」対象として展示に携わることは、教育及びキャリアデザインの

観点からも有意義な試みといえます。また、教員を目指す学生にとっては、将来的に体育理論を通じて、スポーツの意義や価値を子どもたちに教えていくことが求められています。その際、スポーツのどのような部分をビジュアル化し、何を学ばせるのか、そうした伝えることを考える格好の機会にもなります。



歴代オリンピックポスターを見入る学長、副学長

今回の展示のコンセプトは、五輪の年にあたり、在学生たちがこれまで知らなかったり、普段は意識をしていないような本学関係者のメダリストについて、あらためて知る機会を作ることでした。これまでの卒業生たちが世界の頂点を目指し活躍してきたことを知ることで、在学生たちが「天大の体育学部生」というアイデンティティを確認し、愛校心の発揚のみならず自らの自信へとつなげていくことができるからです。

展示のために、ゼミ生たちは天理参考館を見学し、学芸員の方々から展示の方法についての指導を受けました。スポーツの楽しみ方には、スポーツの実践や観戦だけでなく、これまでのスポーツに関わる偉業を知ることによってスポーツの文化などを「学ぶ」ことも含まれます。そのため、すでに国内外にはスポーツに関する博物館や展示施設が多くあり、将来的に学生たちがそうした施設への就職も目指すこともあるでしょう。

展示作業の段階では、保管されている資料からの写真パネルの選定、キャプションの作成、そして展示位置の構成を考えながら展示をしました。さらに、今回の五輪には本学卒業生である穴井隆将選手と女子ホッケーチームの6名が出場することになり、応援のためのパネルも作成しました。穴井選手には五輪前の貴重な時間を割いていただき、演習時に学生からの質問にも丁寧にお答えいただきました。五輪に向けた決意表明や在学生に向けたメッセージなどは、編集作業を経てパネルとして展示しました。

こうした展示は、自分たちのスポーツ活動の様子を展示したいという思いとして、7号棟1階展示「Tenri Club Activity：日々汗と涙を流して」と題するクラブ活動紹介へとつながっていききました。

今回の展示活動は、図らずも「過去」のメダリストから「現在」の世界に挑んでいる卒業生たちへ、さらには「未来」のメダリストの可能性を秘めた在学生としての自分たちへと、脈々と「天理スポーツ」の系譜が受け継がれていることを示すようなものへと発展を見せたのです。

なお、今回の展示につきまして、ご指導、ご協力いただきました本学教職員の方々、および参考館の職員の方々に、この場をお借りしまして感謝の意を表します。(田里千代)

第 250 回研究報告会 (6 月 29 日)

「コンゴブラザビル教会近況報告

—伝道における現地化の諸相—

森 洋明

コンゴにおける伝道活動の様子やその中に見る現地化の諸相などは、これまでに伝道フォーラムを通じて、また本誌の「天理異文化伝道の諸相—コンゴ伝道に見る異文化接触」で紹介してきた。コンゴブラザビル教会の鼓笛隊やコーラス隊などの文化的活動をはじめ、託児から小学校までの天理総合教育施設、また教会の経済的自立の一助としての営利活動など、さまざまな形でコンゴ社会の実情に合わせた伝道のあり方を見ることができている。

今回の発表では、このような活動の最近の様子を映像や画像を通じて紹介するとともに、これまであまり触れてこなかった信仰面における現地化の諸相として、コンゴ独自の教化システムの構築について紹介した。コンゴでその必要性が叫ばれて久しい「入信式」や、信者に対して教義の理解度に応じて付与する独自の資格制度、また講社や布教所等の開所に関する規定などで、これらは目下、現地と海外部の関係者との間で検討を続けている課題でもある。

首都ブラザビルや第 2 の都市ポワントノワールだけでなく、地方都市や公共交通機関によるアクセスがないところにも道が広がりつつある中で、「入信した」ということを自他ともに確認できる機会や、人前で教理を取り次ぐことができる人、またおてふりなどを教えることができる人を選出することは、大変重要なことであると考えられる。その背景には、植民地時代からのキリスト教的信仰のあり方が社会に根付いていること、あるいはそれ以前からのコンゴ社会にあった「宗教文化」の影響が考えられるだろう。また、コンゴでの伝道自体がおちばから物理的に遠く離れている中で行われている上に、さらにその教会の目が届かないような奥地で、いかに間違いなく教義の伝達をしていくのかという、海外伝道の課題が突きつけられているとも言えよう。

視点を変えてこれらの現地化の諸相を見るなら、物理的距離



教会コーラス隊の伴奏
(2012 年 2 月の月次祭)

によって、あるいは経済的理由によって、日本国内では「当たり前」とされる「おちばがえり」がコンゴの「普通の信者」の信仰生活において非日常的となっているという現実が浮かび上がってくる。このような中では、コンゴにおける天理教の

一信者としての日常の信仰のあり方、敢えていうなら、おちばがえりができなくても教理を修め信仰を深めていくことができる教化システムの構築の必要性が問われているように思われる。各種講座や講習会、別席や修養科、あるいはおびや許しやお守りなどを享受できない人びとが、それでも天理教の一信者として信仰を続け、また教祖の教えを人びとと分かち合うことができる「コンゴ版」一信者の信仰スタイルの確立が必要とされているように感じられる。

(From page 10)

founding figures of computers, discussed the question of “can machines think in the same way as humans?” by replacing it with a thought experiment of “can machines respond and ask questions in the same way as humans?” He added adequate memory capacity to a digital calculator and increased its speed and providing it with an appropriate program; thus, he argued that, in a trial game, a computer is able to perform in the same manner as responding to a human being. That is, he held that machines could have the same thought process as a human.

However, to presume an existence of something capable of having the same cognitive capacity as a human being would threaten the place of humans in this world. Therefore, many novels and movies were created over the issue of artificial intelligence.

Today, based on a computer’s data processing system, there are research fields that study human cognitive systems and the intellect; the question of “can machines think?” is no longer cutting edge expression.

As an outsider, I have no intentions of critiquing this field. But I find it very interesting that Turing’s discussion of the trial game has been suggestive in the discussion of the unique feature of the human intellect. I would like to explore this matter for a while.

Saburo Yagi — The Path Towards Normalization (7) Welfare Conditions Abroad: Denmark [2]

Denmark’s policy regarding the handicapped is carried out at three levels of the state, the five regional administrative institutions (*Rigion*), and the ninety eight local government bodies (*Kommune*). Their major roles are to provide social service to all its citizens based on the ideal of universality, regardless of their wealth, and to institute laws regarding various social welfare matters and nurture a social structure that could allow people to maintain their lives. *Rigion* oversees the management of hospitals, medical administration, social welfare for the disabled, regional administrative planning, and policies regarding development and environmental protection. *Kommune* (local self-government body) provides services for the local population, and these include initial medical care, social welfare, healthcare other than medical treatment, preschool education, and services related to everyday life such as garbage and sewage services.

The *Kommune* is not divided into categories of city, town, village based on population, as in the case of our country, but rather formed around a population base that would enable detailed services. The average population is from 10,000 to 20,000 people and the smallest one has about 3,000. Local governance is particularly advanced in Denmark, and the *Rigion* and *Commune* play a significant role in the policy regarding welfare for the disabled.

グローバル天理

第 13 巻 第 9 号 (通巻 153 号)

2012 (平成 24) 年 9 月 1 日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒 632-8510 奈良県天理市杣之内町 1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan